

書標・書評

『本の底力』

高橋文夫著 新曜社・一六〇〇円(税別)

猛烈なスピードで拡大していくインターネット空間において、情報は無際限に集積していく。世界は、情報によって徹底的に制御され、リアルとヴァーチャルの境目は今や無い。

一方、コミュニケーションツールとしてのデジタルメディアの進化、人間社会への浸透は、人間の生活時間を占拠し、「ネット依存症」を蔓延させている。

情報量の極端な増大は、それらがもはや情報ではなくなるといふ逆説的結果に至る。最適な情報に速やかにアクセスできるという保証がなくなるからだ。人気による情報のランキングでは追い付かなくなり、検索エンジンはアクセス者自身のデータを解析して最適解を与える「パーソナル化」をはじめた。今や、人によって検索結果は大きく異なる。しかし、それではアクセス者は自分の身の丈にあった情報しか得られず、知らない世界や、自らを変えてくれる情報に出会うことも出来ない。いったい、

何のための情報か？

書物とは、そもそも世界に満ち溢れた情報を繋留するものであった。本の重みは、世界大に拡がりあてどなく浮遊する情報たちのアンカー(錨)たらんがため、文字通り、本の「底力」なのだ。

著者はデジタルメディアを「文明」、活字メディアを「文化」と見る。「文明」は汎用性、効率性、画一性を、「文化」は制約性、独自性、個別性を属性に持つ。

かつて「文化」を逃れ何もないところから始まったアメリカ「文明」による「グローバルゼーション」という名の世界支配に向かつて、いま本が反撃の狼煙を上げるならば、その引き当ては正しい。